服部俊一（はっとりしゅんいち）

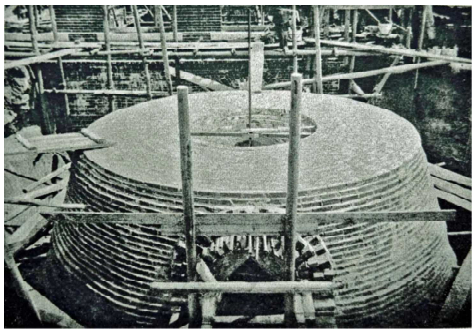
神に仕え、信義に厚く
－紡績界を牽引した機械技術者－

服部俊一（1853 ～ 1928）
出典：『服部俊一追想録』1929 年

■英国で紡績技術を修得

服部俊一は、1853（嘉永6）年、現・山口県山陽小野田市で、医業の傍ら寺子屋を開く士族竹田良安の次男として出生。19歳のとき入塾していた服部東洋の養子となる。20歳で上京、1881（明治14）年の29歳のとき工部大学校機械科第三期生として卒業。同期には日本機械学会を創設した真野文二（まのぶんじ）などがいる。卒業とともに兵庫工作分局（兵庫造船所）に奉職し、機械科長を命ぜられる。5年後に海軍省艦政局に転任する。その1年後の1887年に、請われて尾張紡績（名古屋財界の奥田正香（まさか）が発起人）の会社設立時から携わり、紡績機械購入のため同時に入社した岡田令高（のぶたか）（官営の愛知紡績所所長歴任）とともに英国に渡る。

英国では、オールダムやミドルトンの紡績工場で6か月間職工として従事するなど、紡績業の実務を修得。さらにマンチェスター工業学校の夜間部に通い紡績学を勉強。紡績工場視察では入場許可が得られず、賄賂を渡すこともあったとのエピソードも伝わる。1年後に帰国し、同社の工務支配人として尾張紡績開業期の任を果たす。

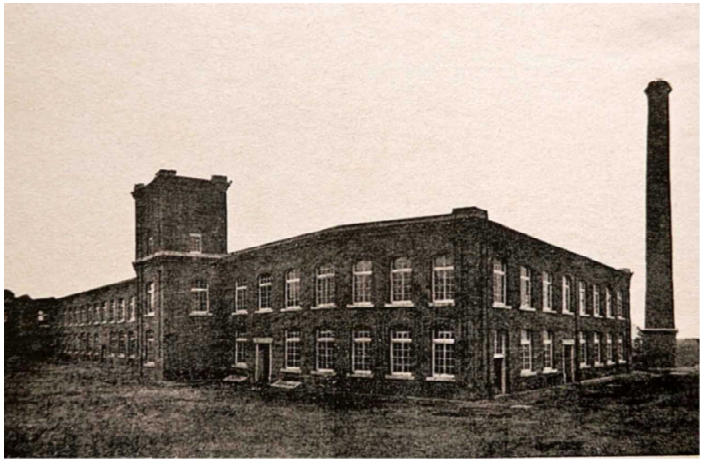


尾張紡績の煙突基礎工事
出典：『本邦綿糸紡績史 第 4 巻』1939 年

■尾張紡績の柱石となる

1889年の尾張紡績操業開始時設置の紡績機械は、ミュール精紡機とリング精紡機合わせて5千300錘であった。この機械据え付けでは英国から二人の技師が来ていた。しかし一人が病で帰らぬ人となる。服部俊一は、永久に墓前に線香や華を供えよと、遺言にも書くほどその恩に報いていた。

開業間もない1891年に濃尾地震で被災するが、新たに1,735坪の工場を新築し、1894年には主力機械をリング精紡機に変えて約2万7千錘（ミュール精紡機含め約3万錘）を設備し、大紡績会社として歩むことになる。服部俊一は取締役支配人として、機械選定から設置に至るまでほとんど一人舞台であったという。尾張紡績の柱石（ちゅうせき）となった人とも称されていた。



尾張紡績　工場全景　　出典：『服部俊一追想録』1929 年

尾張紡績は1905年に三重紡績に合併、服部俊一は工務長に就任。さらに三重紡績と大阪紡績が合併して創立した東洋紡の取締役を務めている。一方で服部俊一は、キリスト教徒として信義に厚く神に近い人格者として尊敬もされていた。

■桑名、津島、知多の紡績会社立ち上げの設計監督

官営の愛知紡績所をはじめ民間の三重紡績や大阪紡績が開業した初期綿糸紡績所勃興期の後を受け、1890年代になると各地に綿糸紡績が次々開業していく。その一つが東海地方では桑名紡績（1895設立）、津島紡績（1895開業）、知多紡績（1896設立）であった。服部俊一はこれらの紡績工場の顧問も兼任し、工場立ち上げ期の設計及び監督も行った。その工場のつくりや配置はみな尾張紡績張りであったと言われた。仕事ぶりでは、機械の整備、作業方法など間然とするところがないほど感心すべきものと評されていた。余は技術家である、と語っていたように常に工場に関心を払う紡績技術者であった。

（天野武弘）

津島紡績全景
出典：『本邦綿糸紡績史 第 7 巻』1944 年